広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	謝霊運の「賞心」と「賞」
Author(s)	中木, 愛
Citation	中國中世文學研究 , 73 : 23 - 56
Issue Date	2020-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049263
Right	
Relation	

謝霊運の「賞心」と「賞」

中木　愛

はじめに

山水詩人と称される謝霊運の詩には、謝霊運が独自に用いた「賞心」の語が散見する。七例中六例が『文選』に採られたこともあって、「賞心」は謝霊運を象徴することばとして広く後世に継承された。しかし、「賞」一字については、謝霊運の特別な山水賞翫の態度を表すとする理解が共有されているのに対し、「賞心」の方はいまだに解釈が定まっていない。「山水をめでる心」か「山水をめでる心をもつ友、ともに山水をめでる友」、あるいは「わが心を知る人、知音」のいずれかに別れ[1]、一冊の注釈書の中でも、詩によって解釈が一様でない場合が珍しくないのである。

日本ではつとに小尾郊一氏が、謝霊運の「賞」字が山水を対象とすることを根拠に「賞心」も「自然を賞する心、そのような心をもつ友」であるとし[2]、『謝康楽詩集』を著した森野繁夫氏も小尾氏の説を受けている[3]。近年これに対して林田慎之助氏が異論を唱え、「自然を賞する心」では謝霊運の「賞心」の使用例は消化できない、また「自然をたのしむ心の友」といった曖昧な概念で用いられたのではないとして個々の例を検討し、すべて「自分の心を識ってくれる人」の意味に解すべきであるとの見解を示している[4]。

この林田氏の説は一定の説得力をもつように思われるが、林田氏が考察対象としたのは『文選』所収の詩のみであり、五臣注や謝霊運集の注に依拠したり、一首の中での文脈上の理解に拠る部分も見られるように思われる。また、「賞」一字については林田氏も「自然をめでる心」であるとするが、「賞心」を「知音」の意味で理解するなら、謝霊運は同じ「賞」字を使いながら、「賞」と「賞心」とで異なった意味を表したのかという疑問も残される。あわせて、川合康三氏が林田論に対する書評において指摘されたように[5]、謝霊運はなぜ知己の意味で「賞心」という語を用いたのかについても、掘り下げる必要があるだろう。本稿では、これらの問題を踏まえて謝霊運の作品全体を視野に入れ、山水体験の軌跡を追いながら、改めて「賞心」と「賞」の意味を探ってみたい。

また、近年では佐竹保子氏が、謝霊運に至るまでの「賞」字の意味について緻密な検証を重ね、「賞」とは、甲から乙へ価値あるなにものかが与えられ、乙から甲へその価値にぴったりと合致する価値をもつ別のなにものかが返されるものであること、その中身は「錫賚（たまう）」「賞揚（ほめる）」「心解（りかいする）」のように、目に見える「物」から非即物的な理解や感動へと変化し、晋末以降「心解」が飛躍的に増加することを究明されている[6]。この、価値の上で一致した二者間のやりとりを「賞」のコア・イメージと見る佐竹氏の指摘は、謝霊運の「賞」および「賞心」の意味を探究する上できわめて示唆的である。このほか、佐竹氏には謝霊運の詩の個別の用例を丹念に読み解いた専論[7]があり、本稿は氏の研究成果に負うところが大きい。

謝霊運において、「賞心」と「賞」の用例が見える詩文は表のとおりである。①～⑦は「賞心」、A～Gと○は「賞」一字の例であり、「心賞」は「賞」一字として検討した。「賞心」と「心賞」を同義と見なす説もあるが、「賞心」が謝霊運による創出である以上、特別な意味づけがあると考えるべきであろう。また、○で示した「贈安成」「述祖徳」はそれぞれ奥深いことばを貴ぶことや皇帝からの褒賞を意味するもので[8]、用法に独自性は見えないため考察対象としなかった。詩以外では、Ⅰ～Ⅳの賦四篇に八例の「賞」字が見られたが、褒賞や恩恵（ⅠⅡ）、書物や仏道の理を究めよろこぶこと（Ⅳ）をいう五例は取り上げていない[9]。真の理解を表す三例（ⅢⅣ）については「五　楽府の「賞心」」および「六　「知音」の系譜から見た「賞心」」のところで言及する。

なお、ゴチックは『文選』所収の作品であることを、詩題下の番号は『文選』（胡刻本）の巻数を示す[10]。

永嘉以前	（○贈安成）（Ⅰ撰征賦）	**①初発都26**
永嘉	**②晚出西射堂22**　**③遊南亭22**	
	A石室山　**B登江中孤嶼26**　（Ⅱ辞禄賦）	
	（○述祖徳二首・其一19）	
	④田南樹園激流殖援30　Ⅲ傷己賦	
始寧退居1	Ⅳ山居賦　**C於南山往北山経湖中瞻眺22**	
	D従斤竹澗越嶺渓行22	
都	**⑤擬魏太子鄴中集八首並序30**	
始寧退居2	E入東道路　**⑥酬従弟恵連25**	
	F石門巖上宿	
臨川以降		
不編年	⑦相逢行　G鞠歌行	

一　都を発つとき　――知音への思い

謝霊運は、東晋の武帝の太元十年（三八五）、名門貴族として会稽に生まれた。若いころ琅邪王の大司馬行参軍を経て撫軍将軍劉毅の幕客となったが、義熙八年（四一二）に劉毅が劉裕に敗れた後は劉裕に仕えた。永初元年（四二〇）劉裕が即位して宋王朝に代わると、康楽県公から同県侯に降格となる。そのころから、劉裕の次子である廬陵王義真のもとに、顔延之や慧琳らと侍るように

なった。しかし、永初三年（四二二）に劉裕が没して太子の義符が即位すると、廬陵王は王位を奪われ、謝霊運も永嘉郡の太守に遷された。このとき三十八歳、めまぐるしい権力闘争の中で運命を翻弄された前半生と言える。

永嘉以前の作は、贈答や公宴の詩が数首伝わるにとどまる。謝霊運の詩は、永嘉赴任と始寧退居によって山水体験が深まるにつれて、大きな展開を見せるようになったと考えられる。

謝霊運の詩に初めて「賞心」の語が見えるのは、都を追放されて永嘉に発つときの作「①永初三年七月十六日之郡初発都」（本稿では「初発都」という）の末句である。この詩は挫折の憂いを鬱々と綴り、次のように結ばれる。

「①初発都」

21　従来漸二紀　　従来 漸く二紀
　始得傍帰路　　始めて帰路に傍うを得たり
23　将窮山海迹　　将に山海の迹を窮めんとし
　永絶賞心悟。　　永く賞心の悟を絶つ。

「悟」は「晤」に同じく対面することで、気心の知れた相手との語らいを表す[11]。向き合うのであるから、そこには謝霊運以外の存在が想定され、おのずと都で親しく交わった人物――謝霊運を評価していた廬陵王やともに侍った顔延之ら――との交流が浮かび上がる。末句は彼らとの訣別を憂えたものである。

では何を「賞」することを言うのか。上の句が山水遊歴の意志を表明することから、文脈上、山水をめでると解釈することも不可能ではない。しかし、都を発つ時点で、謝霊運には特筆すべき自然描写もなければ、誰かとともに山水を鑑賞して楽しむようすを描いた句も見られない[12]。後述するように、謝霊運が山水をめでる態度をはっきりと自覚して、それを「賞」の字によって打ち出すのは、永嘉到着以降のことであり、その場合の「賞」には単にめで楽しむ以上の特別な意味合いが含まれる。永嘉以前の詩が残らなかった可能性は否めないとしても、この詩の「賞」の対象を山水に限定する必然性は見出し難いように思われる。

二　永嘉にて　――山水体験の深まり

永嘉は自然豊かで美しい土地だった。永初三年（四二二）七月から翌年の秋まで、およそ一年の滞在で詠まれた詩の数は三十首にのぼり、生涯、最も多くの詩が作られた時期であった。『宋書』の本伝は、謝霊運が遊歴と詩作に明けくれて郡政を顧みなかったと伝える[13]。

謝霊運は都を発つとき「将に山海の迹を窮めんとす」（①）と詠ったが、山水遊歴開始宣言とでもいうべきこの句のとおり、永嘉への途上から山水を歩き回って美しさを描き始める[14]。山水に遊んで憂いを散じようとする態度は魏晋の詩に広く見られるが[15]、謝霊運の永嘉から始寧にかけての自然描写を追うと、隠棲志向とともに山水を「賞」する態度が定着し深まってゆく軌跡が見て取れる。

永嘉への途次の作「初往新安至桐廬口」[16]では、江も山も開放感に溢れ、雲と夕陽が照り映える景観を前に、

11　江山共開曠　　江山 共に開曠
　雲日相照媚　　雲日 相い照媚す
13　景夕群物清　　景夕 群物清らかに
　対玩咸可喜。　　対玩し咸な喜ぶべし。

と詠っている。「賞心」と「悟」き合う楽しみを絶たれ、「将に山海の迹を窮めんとす」と山水に分け入る意志を示した謝霊運は、ここ新安郡の川のほとりで清らかな景物に「対」峙して賞「玩」する姿を書き留めた。この詩は、山水によって喜びが得られることを明記した、おそらくは最初の例である。ここにはまだ「賞」の字は用いられていない。

永嘉では、山水の中で満たされたり憂いを散じる一方で、憂いや孤独に沈むものも多く見られる。また、老荘の境地へ傾倒するのもこの時期の特徴である。

たとえば、「登永嘉緑嶂山」の「頤阿竟何端、寂寞寄抱一。恬知既已交、繕性自此出」（頤と阿とは竟に何の端ある、寂寞として一を抱くに寄せん。恬と知とは既已に交わる、性を繕うこと此より出づ）や「富春渚」の「懐抱既昭曠、外物徒龍蠖」（懐抱は既に昭曠たり、外物は徒らに龍蠖す）などは、山水の中で超俗の心境を得られたことを詠うが、「七里瀬」や「東山望海」では、憂いを晴らそうと山水に分け入るものの、鳥や植物など自然の景物を前に「遭物悼遷斥」（物に遭いて遷斥を悼む）、「覧物情弥迺」（物を覧て情は弥いよ迺る）と憂いを深め、古の隠者との時空を越えた共感、あるいは老荘の「寂寞」の境地を求める[17]。「池塘生春草、園柳変鳴禽」（池塘 春草生じ、園柳 鳴禽変ず）の名句を生んだ「登池上楼」の詩は、長びくひとり住まいを嘆き、節操を固持することで己を保とうとする[18]。「登上戍石鼓山」のように、気晴らしに山に登っても全く効果がなく、ひたすら孤独と苦悶に沈んでゆくものもある[19]。謝霊運は、孤独や憂いに苛まれた心を慰めるべく永嘉の山水に向かいながら、葛藤を続けた。

では、この時期「賞心」の語はどう現れるのか。「②晩出西射堂」と「③遊南亭」では、いずれも「賞心」の語の前に、自然の景物を前に時の移ろいを感じ、感傷的になるようすが描かれている。

「②晩出西射堂」

1　歩出西城門　　歩きて西城の門を出で
　遥望城西岑　　遥かに城西の岑を望む
3　連鄣畳巘崿　　連鄣は巘崿を畳み
　青翠杳深沈　　青翠は杳として深沈たり
5　暁霜楓葉丹　　暁霜 楓葉 丹く

夕曛嵐気陰　　夕曛　嵐気　陰し
7　**節往戚不浅**　　節往きて　戚い浅からず
感来念已深　　感来たりて念い已に深し
9　羈雌恋旧侶　　羈雌は旧侶を恋い
迷鳥懐故林　　迷鳥は故林を懐う
11　含情尚労愛　　情を含みて尚お労愛す
如何離賞心　　如何ぞ賞心を離れんや
13　撫鏡華緇鬢　　鏡を撫でて緇鬢華く
攬帯緩促衿　　帯を攬りて促衿緩し
15　安排徒空言　　安排は徒らに空言なるのみ
幽独頼鳴琴。　　幽独　鳴琴に頼らん。

夕刻、闇に沈む峰々を望み、時節の移ろいに憂いを深めた謝霊運は、雌鳥が伴侶を恋い、迷える鳥がもとの林を懐かしむ姿を見て、11・12句で「鳥ですら情があって仲間を恋い慕ってやきもきするのに、ましてや「賞心」を離れてどうすればよいのか」[20]と詠う。情を持つ鳥たちの姿に触発され、謝霊運自身も「賞心」へのいとおしさをつのらせているのである。山水の中で憂いを散じるどころかかえって深め、この世の推移に安んじる『荘子』の「安排」の思想[21]を否定した上で、結びでは救いようのない孤独を琴によって慰めようとする。この詩で離れがたいという「賞心」が、山水を賞する心でないことは明らかであろう。

那須智子「謝霊運は何故山水を愛したのか―東晋詩との比較から」[22]は、この詩と湛方生「懐帰謡」（晋詩巻一五）の「胡馬兮恋北、越鳥兮依陽。彼禽獣兮尚然、況君子兮去故郷」（胡馬は北を恋い、越鳥は陽に依る。彼の禽獣すら尚お然り、況んや君子の故郷を去るをや）との類似を指摘し、故郷を恋しがる鳥獣を擬人化して描いたあと人間はなおさらだと詠う詩が、東晋にほかにも数例見えることを指摘する。謝霊運が愛着を強める「賞心」も、故郷と同じように帰るべき心の拠り所を表すものであろう。都で交わった相手を象徴することばではないだろうか。

「③遊南亭」

1　時竟夕澄霽　　時竟りて夕澄み霽れ
雲帰日西馳　　雲帰りて日西に馳す
3　密林含余清　　密林　余清を含み
遠峰隠半規　　遠峰　半規を隠す
5　久痾昏墊苦　　久しく昏墊の苦しきに痾み
旅館眺郊歧　　旅館　郊歧を眺む
7　沢蘭漸被逕　　沢蘭　漸く逕を被い
芙蓉始発池　　芙蓉　始めて池に発く
9　未厭青春好　　未だ青春の好きに厭かざるに
已睹朱明移　　已に朱明の移るを睹る
11　**感感感物歎**　　感感として物に感じて歎き
星星白髪垂　　星星として白髪垂る
13　薬餌情所止　　薬餌は情の止まる所

衰疾忽在斯　　衰疾　忽として斯に在り
15　逝将候秋水　　逝くゆく将に秋水を候ち
息景偃旧崖　　景を息めて旧崖に偃さんとす
17　**我志誰与亮**　　我が志　誰か与に亮らかにせん
賞心惟良知。　　賞心　惟れ良く知らん。

この詩は、雨上がりの清らかな夕暮れ、春から夏へと移ろいの中にある蘭や蓮の花を前に、自らの老いと病に思いを致して帰隠志向を詠う。「水かさが増す秋を待って、身を故郷の崖に休めよう。私のこの思いは誰が分かってくれるだろうか、「賞心」こそがよく理解できるのだ」[23]と結ぶ。

隠棲への思いが理解されることを求める構図は、二度目の始寧隠居時の作「発帰瀬三瀑布望両渓」の結びと共通する。

13　退尋平常時　　退きて平常の時を尋ぬるに
安知巣穴難　　安んぞ巣穴の難きを知らんや
15　風雨非攸愆　　風雨は愆うる攸に非ず
擁志誰与宣　　志を擁きて誰と与にか宣べん
17　倘有同枝条　　倘し枝条を同じくする有らば
此日即千年。　　此の日は即ち千年ならん。

一本の木から伸びる枝を表す「同枝条」は、志がぴたりと一致する同志の喩えであり[24]、「③遊南亭」の「賞心」に通じるだろう。③の「賞心」は、謝霊運の心を理解してくれる知音のような相手を想定したもののように思われる[25]。

ところで、これら②③の「賞心」を「山水をめでる心をもつ友」「ともに山水をめでる友」という小尾説で解することは、個別の詩を見る限り不可能ではない。しかし繰り返しになるが、そのためには親しい人とともに山水をめで、それによって歓びを得たという経験あるいは考え方が前提として必要である。

次に、「賞」の例を見てみよう。「心賞」の語が見える「A石室山」[26]は、謝霊運の自然体験が大きな深まりを遂げる非常に重要な詩である。

「A石室山」

1　清旦索幽異　　清旦に幽異を索め
放舟越坰郊　　舟を放ちて坰郊を越ゆ
3　苺苺蘭渚急　　苺苺として蘭渚急に
藐藐苔嶺高　　藐藐として苔嶺高し
5　石室冠林陬　　石室　林陬に冠たり
飛泉発山椒　　飛泉　山椒に発す
7　虚泛径千載　　虚しく泛び千載を径たり
崢嶸非一朝　　崢嶸として一朝に非ず
9　郷村絶聞見　　郷村　聞見を絶ち
樵蘇限風霄　　樵蘇　風霄に限らる
11　微戎無遠覧　　戎微ければ遠覧すること無く

13　総笄羨升喬　総笄より升喬を羨む
　　霊域久韜隠　霊域は久しく韜隠し
　　如与心賞交　心賞と交わるが如し
15　**合歓不容言**　歓びを合にして言を容れず
　　摘芳弄寒条。　芳を摘みて寒条を弄ぶ。

清らかな朝、景勝を求めて船出した謝霊運の前に、石室山が神妙な姿を現した。林の上に冠をかぶせたように聳え立ち、頂から滝の水が落下する。地元の村人ですら知らないような秘境の場所に、悠久のときを経て存在する姿を目にした感動を、謝霊運は「「心賞」と交わったかのようだ」と喩えた。「心賞」とは、直前に表白した神仙世界への憧憬を受けて、自分の「心」に「賞」するもの――謝霊運が幼い頃から「羨」望し続けてきた神仙世界――を指すだろう[27]。それと「交わる」とは、謝霊運と「霊域」の間に双方向のやりとりがあることを意味し、次句の「合歓」へと発展する。「歓」は「歓愛」や「歓友」（後述⑤「劉楨」および⑥）の語が示すように、昵懇の相手との間に得られる歓びであり、それと同質の歓びを「霊域」と共有できたというのである。人間同士の交流とは異なり、言葉を介する類いのものではない。末句で花を摘み枝をもてあそぶのは、「霊域」の細部に触れて愛おしむスキンシップのような行為ではなかったか[28]。

息を飲むような絶景を目にしたとき、我々は人間の力を遥かに超えた大いなるものの存在を感じ、心が震えることがある。とりわけ大きな不運に見舞われ心身が弱っているときならばその感動は一入であり、無上の慰めや励ましを感じられることもある。謝霊運はこのとき、山水から自身に向けて発せられた何かを確かに感じ取り、山水との交感を果たした。「如与心賞交」の句は、都を追われて「賞心」と隔てられた絶望の中で、初めて然るべき相手に自分の存在価値を認められたかのような体験であったことを物語る。山水はこのとき、謝霊運にとってめで楽しむ以上の意味を持つ存在となったのである。

もう一例、「賞」の字が見えるのは次の詩である。

「B登江中孤嶼」

1　江南倦歴覧　江南　歴覧に倦み
　　江北曠周旋　江北　曠かに周旋す
3　懐新道転迥　新を懐いて道は転た迥く
　　尋異景不延　異を尋ねて景は延からず
5　乱流趨正絶　流れを乱り正絶に赴けば
　　孤嶼媚中川　孤嶼　中川に媚ぶ
7　雲日相輝映　雲日は相い輝きて映え
　　空水共澄鮮　空水は共に澄鮮たり
9　**表霊物莫賞**　霊を表すも物の賞する莫く
　　蘊真誰為伝　真を蘊むも誰か為に伝えん
11　想像崑山姿　想像す　崑山の姿
　　緬邈区中縁　緬邈たり　区中の縁
13　始信安期術　始めて信ず　安期の術

得尽養生年。　養生の年を尽くすを得るを。

目新しさを求めて永嘉江の周辺をめぐる謝霊運の前に、孤島がたたずむ美しい景観が現れた。雲と太陽が照り映え、空も水も澄んだ青さを湛えていた。「霊」妙さが現れても「賞」する者はなく、内に包まれた「真」を誰が伝えようという9・10句「表霊物莫賞、蘊真誰為伝」は、「A石室山」の「霊域久韜隠」と同じく、山水の神々しさが内に隠れてなかなか人に認識されないことをいう。「A石室山」では、霊域を発見した自己の存在を霊域の方も認めてくれたと感じて、交感の歓びへと発展したが、ここでは、山水に秘められた「霊」や「真」を見出して伝える者の不在を嘆き――自分こそ唯一の賞識者であるという自負を含みながら――神仙への憧憬を信仰へと昇華させている。

AとBの前後関係は不明だが、この二首によって、永嘉の山水が「賞」すべき対象となったこと、その「賞」とは、単に美しさをめで楽しむ行為ではなく。奥にある「真」を見出し、時にはそれによって自分自身の存在をも確認でき、歓びを交わすことができるような、極めて神秘的あるいは宗教的な体験を指すと言えるだろう。謝霊運の「賞」は、都追放の挫折と永嘉での特別な山水体験を経て、人間から山水へと対象を拡大させた。その山水体験は、次の始寧でさらなる深まりを見せる。

三　始寧退居
――山水における道の体得と都への思い

永嘉に赴任して一年経ったころ、謝霊運は周囲の反対を押し切って郡守を辞め、郷里の始寧に帰隠した。元嘉三年（四二六）徐羨之らが粛清されると、謝霊運も文帝によって都に召還され、秘書監のちに侍中として仕えたが、国政には関かれず、法外の行動が災いして休職を強いられる。都に出仕した期間（元嘉三～五年、四二六～四二八）を除き、景平元年（四二三）から元嘉八年（四三一）にかけての数年間、謝霊運は住まいを改修して美しい山水に遊び、隠者の王弘之や孔淳之らと交わりながら自由きままな生活を謳歌した。この間作られた詩は二十首に満たず、穏やかで落ち着いた心境を詠ったものが多い。その詩は都に伝わると、あらゆる層から絶大な人気を博したという[29]。

（1）山水における道の体得

始寧において、「賞心」の語は庭造りを描いた次の詩にまず認められる。

「④田南樹園激流植援」

1　樵隠倶在山　樵と隠は倶に山に在るも
　　由来事不同　由来　事　同じからず
3　不同非一事　同じからざるは一事に非ず
　　養痾亦園中　痾を養うも亦た園中

5　中園屏氛雑　中園 氛雑を屏(しりぞ)け
　　清曠招遠風　清曠 遠風を招く
7　卜室倚北阜　室をトして北阜に倚り
　　啓扉面南江　扉を啓きて南江に面す
9　激澗代汲井　澗(たにみず)を激して汲井に代え
　　挿槿当列墉　槿を挿みて列墉に当つ
11　群木既羅戸　群木 既に戸に羅なり
　　衆山亦対牕　衆山 亦た牕(まど)に対す
13　靡迤趨下田　靡迤として下田に趨き
　　迢遞瞰高峰　迢遞として高峰を瞰(みる)る
15　寡欲不期労　欲寡(すくな)くして労するを期せず
　　即事罕人功　事に即きて人功罕なり
17　唯開蔣生径　唯だ蔣生の径(みち)を開き
　　永懐求羊蹤　永く求羊の蹤(あと)を懐(おも)う
19　**賞心不可忘**　賞心 忘るべからず
　　妙善冀能同。　妙善 冀(こいねがわ)くは能く同(とも)にせんことを。

俗気を隔てた「清曠」な庭に、谷川の水を引き入れ木槿の垣根を植えた。あれもこれもと貪欲には望まず、極力人の手は加えない。代々所有する土地に理想の山水空間をセッティングする、隠棲のよろこびを伸びやかに詠った詩である。

末四句は、漢の隠者蔣生が小道を作って羊仲・求仲とのみ交わった故事をふまえて[30]、仲間の来訪を待ち望み、忘れるべくもない「賞心」の存在に思いを馳せて「妙善」を共有したいと願う。「妙善」とは悟りの境地、いわゆる道や理の体得を表す語であり[31]、この「賞心」には、それを共有し得る羊仲・求仲のような隠者の存在が想定されよう。あるいは、始寧で交わった王弘之・孔淳之らの姿を重ねているのかもしれないが、単に庭造りの楽しみや清らかな空間でのひとときを共にする相手をいうものではない。永嘉の作③では、隠棲への思いの理解者として「賞心」を求めたが、ここではさらに進んで、ある意味実現したとも言える隠棲における「妙善」の共有者として「賞心」を希求しているのである。

始寧では、山水体験においても悟りの境地を求めるようになった。それはC～Fの「賞」によって確認できる。

まず、「C於南山往北山経湖中瞻眺」には万物の生の営みを「賞」することによって「理」に通じること、「D従斤竹澗越嶺渓行」には「賞」によって「美」を生じることが説かれる。

「C於南山往北山経湖中瞻眺」
11　解作竟何感　解作は竟(つい)に何をか感ぜしむる
　　升長皆丰容　升長して皆な丰容たり
13　初篁苞緑籜　初篁 緑籜に苞(つつ)まれ
　　新蒲含紫茸　新蒲 紫茸を含む
15　海鷗戯春岸　海鷗 春岸に戯れ
　　天鶏弄和風　天鶏 和風に弄(たわむ)る
17　**撫化心無厭**　化を撫して心は厭くこと無く

19　**覧物眷彌重**　物を覧(み)て眷(かえりみ)ること彌(いよ)いよ重なる
　　不惜去人遠　人を去ることの遠きを惜しまず
　　但恨莫与同　但だ与に同じくする莫きを恨む
21　孤遊非情歎　孤遊は情の歎くところに非ず
　　賞廃理誰通。　賞廃すれば理誰か通じん。

これは、南山から巫湖を経て対岸の北山の住まいに赴く途上の眺望を描いた詩である。春になって雷雨が降り注ぎ（「解作」）[32]生き物が豊かに育つようす（「丰容」）を描き、芽を出したばかりのタケノコや蒲、和やかに戯れる鷗や鶏などを前に「物を覧て眷ること彌いよ重なる」と愛おしさをつのらせる。末四句では、そのよろこびが誰とも共有できないことを恨みつつ、「理」に通じるための「賞」の重要性を強調する。「賞」とは、永嘉の体験に鑑みれば、山水の中に秘められた「真」を認めることであった。謝霊運は始寧でも、造化の営みに従って生き生きと生育する自然の姿に真の「理」[33]を見たのである。

渓谷の散策を詠んだDの詩にも、山水を「賞」することによって得られた境地と共有者の不在が綴られ、道に対する説理が展開される。

「D従斤竹澗越嶺渓行」
15　想見山阿人　想い見る 山阿の人
　　薜蘿若在眼　薜蘿 眼に在るが若し
17　握蘭勤徒結　蘭を握りて勤(うれ)いは徒らに結ぼれ
　　折麻心莫展　麻を折りて心は展(のぶ)る莫し
19　**情用賞為美**　情は賞を用(もつ)て美と為る
　　事昧竟誰弁　事昧(くらし)ければ竟(つい)に誰か弁ぜん
21　**観此遺物慮**　此を観て物慮を遺(わす)れ
　　一悟得所遣。　一悟 遣(や)る所を得ん。

渓流に沿って進みながら、浮き草を眺めたり水を汲んだり。山中の隠者（「山阿人」）に会えない結ぼれた思いを綴ったあと、美しい景物を前に一気に悟りの境地へ到る。19・20句は難解とされるが、文脈から推せば「情」は末二句にある「物慮」であり、「遣」るべき雑念や憂いを指すだろう。「賞」を通じて「美」が生まれるとは、「賞」の対象である山水の側から捉えれば、「賞」されること（真の姿や価値、理を見出されること）によって「美」という性質が発掘される、あるいは具わるということであり、「賞」の主体である人間の側から見れば、「賞」によって「美」を認めることで心が浄化され憂いが消滅する、ということになろう。すなわち「賞」という行為のもつ審美作用ないし浄化作用を捉えたものと言える。

永嘉では「遭物悼遷斥」（「七里瀬」）や「覧物情弥迥」（「東山望海」）のように、山水を前に時の移ろいを嘆き憂いを深める句が目立ち、「安排徒空言」（②）のように推移に委ねる『荘子』の思想を否定する句さえ見えた。これらは、始寧で山水を前に憂いが消えることをいった「観此遺物慮」（D）や、慈愛の眼差しを注ぐ「覧物眷彌

重」（C）と鮮やかな対照をなしており、謝霊運の始寧での心の安定を映している。

「E入東道路」は、都への出仕を経てふたたび始寧に帰る途次の作であり、「心賞」の語が見える。折しも清明の時節、草花が和やかな春に感応して生き生きと茂っていた。謝霊運は、柳や桃花、雉のつがいや細い麦の穂を眺めながら、賑やかな村を抜けて郷里へと向かった[34]。

「E入東道路」

13 **満目皆古事**　目に満つるは皆な古事
心賞貴所高　心に賞して高しとする所を貴ぶ
15 魯連謝千金　魯連は千金を謝し
延州権去朝　延州は権として朝を去る
17 行路既経見　行路既に経て見る
願言寄吟謡。　願わくは言に吟謡に寄せん。

13・14句の「目に映るものはすべて古の事、心に「賞」して気高さを貴ぶ」とは、道中の穏やかな春景が、古の隠者魯仲連や季札らの隠棲空間に連なり、その景色が帯びる麗しい清らかさとともに、彼らの高潔さ、清廉さを「賞」することをいう。魯仲連は千金もの褒賞を辞退し、延陵の季札は王位を拒んで朝廷を去った人物であり[35]、謝霊運はそこに自身の帰隠を重ねた。この「賞」は、目の前の山水の中に、古の賢者の行為に通じる価値を認めたことを表す。

「F石門巖上宿」は、始寧の石門山の住まいで月を眺めて詠んだ詩であり、山水の「妙」をともに「賞」する相手がいないことを『楚辞』の表現を用いて嘆く[36]。

「F石門巖上宿」

5 鳥鳴識夜棲　鳥鳴きて夜に棲むを識り
木落知風発　木落ちて風の発るを知る
7 異音同至聴　異音同に聴を至し
殊響俱**清越**　殊響俱に清越なり
9 **妙物莫為賞**、妙物為に賞する莫く
芳醑誰与伐　芳醑誰と与に伐らん
11 美人竟不来　美人竟に来たらず
陽阿徒晞髪。　陽阿徒らに髪を晞かす。

この詩で注目したいのは、月光に照らされた夜のしじまに鳥の鳴き声や枝が落ちる音を聴き取り、その妙味を「清越」と表している点である。「清越」とは音質の清らかさと響きの広がりとを捉えた表現だが、『礼記』聘義に「夫昔者君子比徳於玉焉……叩之其声清越以長」（夫れ昔者君子は徳を玉に比す……之を叩けば其の声清越にして以て長し）とあり、孔子のことばとして、君子の徳を玉の音に喩えて形容する表現が見える[37]。ここから、謝霊運が鳥や木々など自然界のかすかな音に対して、君子の徳に繋がるような美を感得したこと、それほどまでに「賞」の感性が研ぎ澄まされていたことが見て取れる。

山水の美しさを「賞」して万物の真理に到達しようとする始寧期の山水観について、矢淵孝良「謝霊運山水詩の背景―始寧時代の作品を中心にして」[38]は、『荘子』知北遊に「天地有大美而不言、四時有明法而不議、万物有成理而不説。聖人者、原天地之美、而達万物之理」（天地は大美有るも言わず、四時は明法有るも議せず、万物は成理有るも説かず。聖人は、天地の美を原ねて、万物の理に達す）とある思想を礎としつつ、さらに深いところで仏教の頓悟思想が反映されていると論じる。矢淵氏はまた、謝霊運の山水遊歴が仏教的悟りを得るための、菩薩行の一環だった可能性についても論じている。謝霊運の思想や仏教体験については、すぐれた先行研究の蓄積があり、たとえば小川環樹氏は、謝霊運が山水に浄土という仏教的ビジョンを重ね見たことを早くに指摘している[39]。本稿では深く立ち入らないが、謝霊運は始寧の清らかな山水の中で、実体験を通して悟りの境地に到るという独自の山水観を得たのである[40]。

（2）都への思い

始寧における残りの「賞心」の例（⑤⑥）には、都への強い思いが認められる。まず、「⑤擬魏太子鄴中集詩八首並序」は、元嘉三年（四二六）、始寧から都に召還され出仕したときの作とされる。魏の曹丕をとりまく建安文壇の集いに模したもので、謝霊運が廬陵王義真のもとに侍ったころの愉しみを投影したものと見るのが定説である[41]。王位を奪われた義真は、少帝の廃立を企てる徐羨之・傅亮らによって庶人に落とされ、元嘉元年（四二四）に十八歳の若さで謀殺された。謝霊運は、始寧から都に赴く途中、廬陵王の墓に立ち寄り、悲痛と憤慨の思いを「廬陵王墓下作」に綴っている。

⑤の八首の連作は曹丕・王粲・陳琳・徐幹・劉楨・応瑒・阮瑀・曹植に擬えて詠われるが、「賞心」の語は、曹丕の立場からこの集いの歴史的価値を説いた序の部分に見える。

建安末、余時在鄴宮、朝遊夕讌、究歓愉之極。天下**良辰美景、賞心楽事**、四者難幷。今昆弟友朋、二三諸彦、共尽之矣。古来此娯、書籍未見。何者、楚襄王時有宋玉唐景、梁孝王時有鄒枚厳馬。遊者美矣、而其主不文。漢武帝徐楽諸才、備応対之能、而雄猜多忌。豈獲**晤言之適**。不誣方将、庶必賢於今日爾。歳月如流、零落将尽。撰文懐人、感往増愴。（建安の末、余は時に鄴宮に在り、朝に遊び夕に讌し、歓愉の極を究む。天下の良辰・美景、賞心・楽事、四者幷せ難し。今昆弟友朋、二三の諸彦、共に之を尽くす。古来此の娯しみ、書籍に未だ見えず。何となれば、楚の襄王の時宋玉・唐・景有り、梁の孝王の時鄒・枚・厳・馬有り。遊ぶ者は美なるも、其の主は文ならず。漢の武帝のとき徐楽ら諸才、応対の能を備うるも、雄猜多忌なり。豈に晤言の適を獲んや。方将を誣せず、必ず今日に賢るに庶きのみ。歳月は流るるが如く、零落して将に尽きんとす。

文を撰し人を懐い、往に感じて愴しみを増す。）

天下の「良辰（良き時）・美景（麗しい景）・賞心・楽事（楽しみ事）」という四つの要素が奇跡的に揃ったこの集いを、兄弟や友、優れた仲間とともに堪能できた歓びを謳歌し、このような娯しみは古の文献に見えないという。その理由は、君主の側が文学の函養に欠けていたり（「其主不文」）、荒々しい性質で猜疑心が強く打ち解けて語り合えなかったためだ（「豈獲晤言之適」）として楚の襄王と梁の孝王、漢の武帝の時代を例に挙げる。裏返せば、自分たちの集いには「晤言之適」という語らいのよろこびがあったのだと自負していることになる。

語らいをいう「晤（悟）」の字は、最初に永嘉に左遷されるときの作①にも「永絶賞心悟」と見え、都における「賞心」との交わりを表していた。ここでは理想的な君臣のありかたを象徴するものとして、おそらくは謝霊運自身の追憶をもとに記されており、「賞心」は、そういった「晤言之適」をもたらす要素の一つとなっている。この「賞心」も①と同じく、ともに語らう親しき相手を象徴するものであろう。

⑤の八首に共通するモチーフは、乱世において君恩にあずかったことへの感謝と、諸賢と交わることのよろこびであり、文学史に名を刻んだ華やかな建安文壇のありようが浮かび上がる。そこに備わった「賞心」の「賞」が何を対象とするのかを考えるとき、王粲が知遇を得たことを表すのに「賞」の字が用いられている点、そして「晤言之適」の具体的な様相が随所に描かれている点が注目される。

・慶泰欲重畳、公子特先賞、（慶泰　重畳せんと欲す、公子　特り先ず賞す）　「王粲」

・論物靡浮説、析理実敷陳。羅縷豈闕辞、窈窕究天人（物を論じて浮説靡く、理を析ちて実に敷陳す。羅縷して豈に辞を闕かんや、窈窕として天人を究む）　「魏太子」

・清論事究万、美話信非一（清論　事は万を究め、美話　信に一に非ず）　「徐幹」

・既覧古今事、頗識治乱情。歓友相解達、敷奏究平生（既に古今の事を覧、頗る治乱の情を識る。歓友　相い解達し、敷奏　平生を究む）　「劉楨」

・始奏延露曲、継以闌夕語。調笑輒酬答、嘲謔無慙沮。傾軀無遺慮、在心良已叙（始めに延露の曲を奏し、継ぐに闌夕の語を以てす。調笑して輒ち酬答し、嘲謔して慙沮する無し。軀を傾けて慮いを遺す無く、心に在るところ良に已に叙ぶ）　「応瑒」

・妍談既愉心、哀弄信睦耳（妍談　既に心を愉しましめ、哀弄　信に耳に睦ぐ）　「阮瑀」

・衆賓悉精妙、清辞灑蘭藻（衆賓は悉く精妙にして、清辞　蘭藻を灑ぐ）　「平原侯植」

これらは、真理を遍く追究する活発な議論、夜どおし繰り広げられる気兼ねのない歓談、清らかで美しい詩文のやりとり、親友らと治乱についての見識を共有しながら君のために尽くすようすである。文学や政治、哲学や思想などの高尚な談議から他愛ない談笑まで、折々の「晤言之適」を鮮やかに映し出した描写と言えよう。

このような談論の楽しみは、曹丕自身も腹心呉質への書簡の中で描いている。

毎念昔日南皮之遊、誠不可忘。既妙思六経、逍遥百氏、弾碁間設、終以六博。高談娯心、哀箏順耳。（昔日の南皮の遊を念う毎に、誠に忘るべからず。既に六経を妙思し、百氏に逍遥し、弾碁間に設け、終るに六博を以てす。高談は心を娯しましめ、哀箏は耳に順う。）

曹丕「与朝歌令呉質書」（『文選』巻四二）

また、曹丕から呉質に宛てたもう一つの書簡「与呉質書」（『文選』巻四二）には、文人らの相次ぐ死を悼んで遺文集を編むことが記されており[42]、謝霊運の詩序がこれに依拠したことがうかがえるが、そこでは昔遊を追想して一人ひとりの文才を評することに紙幅を割いたあと、次のように綴られている。

昔伯牙絶絃於鍾期、仲尼覆醢於子路、痛知音之難遇、傷門人之莫逮。諸子但為未及古人、自一時之雋也。（昔　伯牙は絃を鍾期に絶ち、仲尼は醢を子路に覆し、知音の遇い難きを痛み、門人の逮ぶ莫きを傷めり。諸子は但だ未だ古人に及ばずと為すも、自ら一時の雋なり。）　曹丕「与呉質書」（『文選』巻四二）

彼らの才能を識る「知音」として文集を編んで後世に残さなければならないという、曹丕の自負と使命感が見て取れる。

一方、呉質も曹丕への返書「答魏太子牋」（『文選』巻四〇）において、仲間や君主の文才を大いに賞揚して、

遊宴之歓、難可再遇。盛年一過、実不可追。臣幸得下愚之才、値風雲之会。（遊宴の歓は、再び遇うべきこと難し。盛年一たび過ぐれば、実に追うべからず。臣幸いに下愚の才もて、風雲の会に値うを得たり。）

と偲ぶ。「風雲之会」とは、龍が吟ずれば雲が従い虎が嘯けば風が従うという『周易』乾卦・文言伝のことばにもとづき[43]、すぐれた君臣の邂逅を喩えた表現である。建安文壇の集いは、君主の側からも臣下の側からも、互いの才能へ賞美を伴って回想されるものであった。

曹丕のもとではたびたび遊宴が催された。建安の文人たちが行楽や宴の「場」としての自然美を写実的に描いたことは、のちの山水詩の先蹤となるが[44]、山水はあく

まで集いの舞台として描かれるにすぎず、彼らがそれをめで楽しむ態度は言語化されていない。謝霊運が模した⑤の詩でも、山水遊歴のようすは一般的な描写が数句見えるに留まり[45]、特段、鑑賞する態度は見られない。そして「賞」の字は「王粲」の詩のように、才能を発掘されたことを表すのに用いられていた。

以上から、建安文壇の集いに揃っていた「賞心」の「賞」とは、山水ではなく人間の価値に対する賞識であり、「賞心」とは、具体的には、曹丕が自らを鍾子期に託して「知音」と自負したように、また謝霊運が「王粲」に擬して「公子 特り先ず賞す」と詠じたように、才能を見出して恩恵を授ける君主、あるいはともに談議を繰り広げ、詩文のやりとりや談笑を交わすような同志――それは互いの価値を認め合ってこそ可能となる――を想定したことばと言えるのではないか。

ちなみに、この詩序は日本文学にも深く受容された。たとえば、天元二年（九二九）に上野太守の盛明親王が催した詩宴で源順が著した「暮春陪上州大王池亭、同賦『渡水落花来』各分一字、応教」の詩序（『本朝文粋』巻一〇）には、「賓友畢会、笙歌相随、是所謂賞心楽事也」（賓友 畢く会し、笙歌相い随う、是れ所謂賞心楽事なり）と記されており、「賞心」が宴に集う友の意味で理解されていたことがうかがえる[46]。

次に、「⑥酬従弟恵連」は、再度の退居後に謝恵連「西陵遇風献康楽」（『文選』巻二五）に答えたものである。謝恵連は、曽祖父同士が兄弟にあたる族弟で、謝霊運が始寧に帰ったころ知り合い、二度目の退居時に親密になった[47]。謝恵連は、元嘉七年（四三〇）に司徒・彭城王義康の法曹参軍として都へ赴任する途上で、謝霊運に寂しさと苦悩を訴える詩を寄せた。謝霊運は、ともに過ごした時間を振り返り、別れの悲しみと再会の期待を込めてこの詩を返した。

「⑥酬従弟恵連」

（第一章）

1　寝瘵謝人徒　瘵に寝ねて人徒を謝し
　　滅迹入雲峰　迹を滅して雲峰に入る
3　巖壑寓耳目　巖壑に耳目を寓し
　　歓愛隔音容　歓愛は音容を隔つ
5　**永絶賞心望**　永く賞心の望を絶ち
　　長懐莫与同　長く与に同じくする莫きを懐う
7　末路値令弟　末路に令弟に値い
　　開顔披心胸。　顔を開きて心胸を披く。

（第二章）

1　心胸既云披　心胸 既に云に披け
　　意得咸在斯　意に得ること咸な斯に在り
3　凌澗尋我室　澗を凌り我が室を尋ね
　　散帙問所知　帙を散じて知る所を問う
5　夕慮暁月流　夕に暁月の流るるを慮り

7　朝忌嚊日馳　朝に嚊日の馳するを忌む
　　悟対無厭歇　悟対して厭歇無し
　　聚散成分離。　聚散 分離を成す。

第一章では、帰郷後の深い孤独と、謝恵連が訪れた際のよろこびが詠われる。山奥に身を委ねて、親しかった仲間（「歓愛」）と隔たり、「賞心望」が絶たれて楽しみを共有できないことを嘆いてきたが、晩年に謝恵連と会って心がぱっと晴れたという。

「歓愛」は男女や親友同士の睦まじい間柄を象徴する語であり[48]、愛する仲間と隔絶した憂いが、第5句の絶望に連なっている。この「永絶賞心望」は、最初に都を追われたとき、昵懇の相手との語らいが絶たれたことを嘆いた「永絶賞心悟」（①）と全く同じ言い回しであり、これらの「賞心」が同じ意味であることは措辞のうえからも明らかである。

第二章では、謝恵連と過ごした時間と別れが描かれる。二人の交流は、ともに山水をめでることではなく、書物を開いて夜どおし語り合う姿（「散帙問所知」）として具象化され、そこに向き合うことをいう「悟対」の語が使われている[49]。文学談議の楽しみは、建安文壇に備わっていた「晤言之適」（⑤）であり、「賞心」との語らいは都での理想の交わりを象徴するものであった（①）。つまりこの詩には、謝霊運が都を離れて失った「賞心」との時間が、謝恵連との語らいによって、一時的に再現できたよろこびが示されているのである。

四　「賞心」と「賞」――対象の区別

その後、会稽郡の太守孟顗と湖の干拓をめぐって衝突した謝霊運は、孟顗に謀叛の異志ありと告発され、弁解のために上京する。無罪は認められたが帰郷は許されず、臨川郡の内史に転ぜられた。臨川では職務怠慢と糾弾され、これに武力で抵抗したことで斬刑の命が下った。文帝の擁護により広州流謫に減刑されたが、移送中に脱走が企てられたとして棄市の刑に処せられた。元嘉十年（四三三）、四十九歳であった。

非業の死に向かって運命の急降下を辿った二年間、詠われた数首の詩には無念や絶望が綴られている。始寧での伸びやかな暮らしを回顧する内容も見えるが、「賞心」や「賞」の語が使われることはなかった。

それではここで、謝霊運の「賞心」と「賞」を見直してみよう。

最初に都を追われたとき「賞心」との語らいの隔絶を嘆き（①）、左遷地の永嘉では「賞心」への愛着や思慕の情をつのらせ（②）、隠遁の思いの理解者として「賞心」を求めた（③）。帰隠した始寧では「妙善」という悟りの境地の共有者として「賞心」を求め（④）、その後都に召還されると、君主や仲間との在りし日の交わりを偲んで「賞心」の語に理想を託した（⑤）。再び帰隠した始寧で謝恵連と親密になると、かつては永遠の隔絶を覚悟した

「賞心」の一時の回復を喜んだ（⑥）。「賞心」との交流が向き合って語らう（「悟」）姿に象徴されたこと（①）、「賞心」の喪失が謝恵連との文学の語らい（「悟」）によって回復したこと（⑤）、「賞心」が、語らいのよろこび（「晤言之適」）を伴った理想的な君臣の集いを成立させる一要素として記されていたこと（⑥）を加味すれば、「賞心」とは、真の価値を理解して語り合える知音のような相手を想定したことばだと言えるだろう。そして、謝霊運にとって都を離れる憂いは、「賞心」との隔絶、すなわち自分の存在や思いが認められなくなること、自分を認めてくれる相手と語り合えなくなることに代表されたのである。

一字の「賞」は、永嘉の地でその対象が人から山水へと拡大した。それは、秘境の山水に「真」の姿を発見して歓びをともにするという特別な体験によるものであり（AB）、始寧でさらなる高まりと深まりを遂げ、悟りの境地に繋がる行為へと発展した。具体的には、造化の営みに従って生息する自然を慈しみながら「理」を感得し（C）、山水をめでることを通して「美」を見出し心の浄化と悟りを得るもの（D）であり、あるいは山水の中に古の賢者に繋がる要素を認めたり（E）、かすかな音の世界に君子の徳に繋がる妙味を見出すものであった（F）。このように「賞」が特別な山水体験を表すようになってからも、「賞心」は「賞」独特の山水の色合いに染まることはなく、依然として、価値を認め心を通わせる相手、知音のような存在を象徴するものとして用いられた（⑤⑥）。つまり謝霊運は、詩においては、自分の真のありようを理解してくれる知音の存在を「賞心」と表し、山水と向き合いながら真や美、徳に繋がる価値などを見出す体験を「賞」一字で表したのである。当然ここには、謝霊運の創意が働いていよう。

もっとも、「賞心」の「賞」も一字の「賞」も、価値を認めてよろこびめでるという本質の部分、また佐竹保子氏が究明した「価値の上で一致した二者間のやりとり」というコア・イメージ（謝霊運の時代は、とくに徳や才能、美や趣きを与える相手に十全な理解と感動を返すというもの）は同じであり、対象が人間であるか山水であるかの違いである。

さらに以上の結論は、残りの楽府の用例（⑦G）によって補強することができそうである。

五　楽府の「賞心」
――理想の交友像と「心」の重視

謝霊運の楽府「⑦相逢行」「G鞠歌行」には、理想の交友像が「賞心」や「賞」の語を用いて示されている。

謝霊運の楽府は古楽府を襲うが、直接には擬古詩の盛行を背景として評価されていた陸機の作（「長安有挾斜行」「鞠歌行」）に倣ったものであり、謝恵連との交流を通して集中的に創作されたと考えられている[50]。謝霊運が謝恵連と交流を始めるのは始寧退居後のことであり、とすれば、この二首はおのずと「⑥酬従弟恵連」の前後に繋年される。

まず「⑦相逢行」の中で、交友に言及した部分を見てみよう。

「⑦相逢行」
（第一章）
1　行行即長道　　行き行きて長道に即き
　　道長息**班草**　　道長くして息いて草を班く
3　**邂逅賞心人**　　賞心の人に邂逅し
　　与我傾懐抱　　我と懐抱を傾く
5　夷世信難値　　夷世　信に値い難し
　　憂来傷人　　憂い来たりて人を傷ましむ
7　平生不可保。　　平生　保つべからず。

長い旅の途中で草の上に憩い、「賞心の人」に出会って心の内を打ち明けるという。草を敷くことをいう「班草」の語は、『後漢書』隠逸伝・陳留老父に、党錮の禁を逃れて辞官した張升が帰郷の途上で友人と出くわして語り合う場面に「去官帰郷里、道逢友人、共班草而言」（官を去りて郷里に帰るに、道に友人に逢い、共に草を班きて言う）と見え、この章が全体として張升の話を踏まえていることが分かる。張升らはこのあと、賢者が弾圧され生命が危機に瀕している世の行く末を嘆き、抱き合って泣く[51]。謝霊運はここに自身の不遇と苦衷を重ね、心を曝け出せる得がたい「友人」のことを「賞心人」と言ったのである。

（第四章）
1　水流理就湿　　水流るれば理として湿に就き
　　火炎同帰燥　　火炎ゆれば同に燥に帰す
3　**賞契少能諧**　　賞契　能く諧うこと少なく
　　断金断可宝　　断金　断じて宝とすべし
5　千計莫適従　　千計　適として従う莫し
　　憂来傷人　　憂い来たりて人を傷ましむ
7　万端信紛繞。　　万端　信に紛繞たり。

第四章では、水が湿気のある方に流れ火が乾燥したところから生じるといった自然の反応の理を、交友の在り方に重ねる。水と火の喩えは『周易』乾卦・文言伝を踏まえる[52]が、つづく「断金」も『周易』繫辞伝上に見える孔子のことば、「二人　心を同じくすれば、其の利は金を断ず」に基づき、君子が心を合わせることで発揮し得る力の大きさをいう表現である[53]。つまりこの章では、互いに才能を認め合い心がぴたりと一致するような相手、心を一つにすれば金をも断ち切るような尊い交わりを切望し、それが得られない現実を憂えているのである。

（第五章）
1　巣林宜択木　　林に巣くうに宜しく木を択ぶべし

2　**結友使心暁**　友と結ぶに心を暁かにせしむ
3　心暁形迹略　心暁かにして形迹は略なり
4　略邇誰能了　略にして邇し　誰か能く了せん
5　相逢既若旧　相い逢いて既に旧の若し
6　憂来傷人　憂い来たりて人を傷ましむ
7　片言代紵縞。　片言もて紵縞に代えん。

第五章は、友となるにはまず心を分かり合うべきであり、そうすれば格式張った礼儀など省略できるという。そして、そういった理想の交友が叶わない現実を嘆き、衣類ではなく言葉で思いを寄せ合うような尊い交わりを求める[54]。

以上から、「⑦相逢行」には、苦境において心の内を吐き出せるような「賞心の人」、互いに価値を認めて心が一致し自然に響き合って共に偉力を発揮できるような相手との気兼ねのない交流が、究極の理想として示されており、心を分かり合う点に最も重きを置いていることが見て取れる。

次に「G鞠歌行」を見てみよう。

「G鞠歌行」
1　徳不孤兮必有隣　徳は孤ならず　必ず隣有り
　唱和之契冥相因　唱和の契うは冥に相い因る
3　譬如虬虎兮来風雲　譬えば虬・虎の風・雲を来らしむるが如く
　亦如形声影響陳　亦た形・声に影・響の陳るが如し
5　**心歓賞**兮歳易淪　心に賞を歓ぶも歳は淪ぎ易し
　隠玉蔵彩疇識真　玉を隠し彩を蔵し　疇か真を識らん
7　叔牙顕、夷吾親　叔牙顕かにし、夷吾親しまる
　郢既歿、匠寢斤　郢は既に歿し、匠は斤を寢む
9　覧古籍、信伊人　古籍を覧るに、信に伊の人あり
　永言**知己**感良辰。　知己を永言し　良辰に感ず。

冒頭の四句では、『論語』『礼記』『周易』『尚書』の経書の典故をふんだんに鏤めて、徳が響き合う理想の交わりを示す[55]。中でも第3句が拠る『周易』乾卦・文言伝の「雲は龍に従い、風は虎に従う」は、建安文壇のすぐれた君臣関係を喩えた「風雲之会」（呉質「答魏太子牋」）の典拠でもあり、「⑦相逢行」第四章に見えた水と火の典故（「水流湿、火就燥」）の後続の部分である[56]。第5句の「心歓賞」は、そういった徳ある交わりによって賞識を得られたよろこびを言うのであろう。歳月が移ろい才能が見出されない嘆きに連なることから、「⑤擬魏太子鄴仲集詩八首並序」と同様に廬陵王に仕えていた日々への懐旧を含むのかもしれない[57]。結びでは、現実には得がたい「知己」の存在を古典の中に確認して慰めとする。

謝霊運は「Ⅲ傷己賦」においても、廬陵王から深い寵

愛を受けたことを、卞和が名玉の価値を見抜き伯楽が駿馬の能力を見極めた故事[58]に擬えている。

嗟夫、卞**賞**珍於連城、孫別駿馬於千里。彼珍駿以貽愛、此陋容其敢擬（嗟夫、卞は珍を連城に賞し、孫は駿馬を千里に別つ。彼は珍駿以て愛を貽られ、此は陋容もて其れ敢て擬う）　「Ⅲ傷己賦」

この賦の「賞」には、磨けば光る原石のような己の才能への自負が、多分に含まれていることがうかがえる。

ところで、Gの詩で、真の才能が見出されないことを嘆いた第6句「隠玉蔵彩疇識真」は、永嘉における特別な山水体験を描いた句「表霊物莫賞、蘊真誰為伝」（B「登江中孤嶼」）の表現に似る。秘境の山水の中に「真」を見い出した感動は、「A石室山」の詩にも「霊域久韜隠、如与心賞交」と詠われていた。ここからも「賞」の本質は同じで、対象が人間か山水かの違いであること、都を離れて失われた知音との交流が、永嘉の地で山水との間に結ばれたことが確認できよう。

⑦とGの楽府には、謝霊運が思慕し求めつづけた「賞心」像が、鮮やかに映されていると言えるだろう。それは、心が通じあい、心の内を曝け出せる相手、奥にある真のありようを理解し、互いの美点が響き合うような相手を表すことばであった。そしてそこには、己の才能への自負も含まれていると言える。

謝霊運が心の交流や理解を切に求めたことは、「臨終詩」にも表れている。刑に処せられる直前、絶望の底にあった謝霊運は次のように詠った。

「臨終詩」
7　邂逅竟無時　邂逅　竟に時無く
　修短非所愍　修短は愍む所に非ず
9　恨我君子志　恨む　我が君子の志の
　不得巖上泯　巖上に泯ぶるを得ざるを
11　**送心正覚前**　心を送る　正覚の前
　斯痛久已忍　斯の痛み　久しく已に忍ぶ
13　唯願乗来生　唯だ願はくは来生に乗じ
　怨親同心朕。　怨親　心朕を同じくせんことを。

然るべき明主との邂逅がかなわず、君子の志が遂げられなかった現実を恨みつつ、「心」を「正覚」のもとに送って痛みに耐え忍んできたのだという。「正覚」とは正しい悟り、あるいは真理を悟った人、ほとけを意味する。死を前に仏道を唯一の拠り所とする思想が見て取れるが、同時に「賞心」を求めることすらできなくなった現実への絶望が滲んでいるようにも思われる。結びでは、怨恨の者とも親しき者とも斉しく「心」を同じくしたいという最期の願い[59]を来世に託す。謝霊運が非業の死を前に切願したのは、敵味方を問わないあらゆる人々との「心」の共有であった。

六　「知音」の系譜から見た「賞心」

以上、謝霊運の「賞心」が、「自然をめでる心」ではなく、「知音」のような存在を想定したものであることを論じてきた。ここで、謝霊運の「賞心」を「知音」の語の系譜の中に置いてみると、この表現が生まれ出た背景が浮かび上がってくる。

「知音」とは「自分の心をよく理解してくれる人」を表す成語であり、琴の名手である伯牙の演奏を鍾子期がよく聴き分けた故事に由来する。実はこの故事からは、「知音」のほかにも「賞音」という表現が生まれており[60]、「知音」も「賞音」も謝霊運の時代に故事から独立して、音楽とは関係のない文脈で使われるようになるのである。

「知音」の出典として知られる『列子』湯問篇には、次のような記述が見える。

曲毎奏、鍾子期輒窮其趣。伯牙乃舎琴而歎曰、「善哉、善哉、子之聴夫、志想象、**猶吾心**也。吾於何逃声哉。」

（曲奏せらるる毎に、鍾子期 輒ち其の趣を窮む。伯牙 乃ち琴を舎きて歎じて曰く、「善きかな、善きかな、子の聴くや、志の想象するは、猶お吾が心のごとし。吾れ何くに声を逃れんや」と。）

『列子』湯問篇

伯牙は、自分が思い浮かべた景色をぴたりと言い当てる鍾子期に対して「すばらしいことよ、すばらしいことよ、あなたが私の琴の音を聴いて心に想い描くものは、まるで私の心そのものだ」と感嘆した。伯牙にとっての鍾子期は、才能というより自分の「心」の底を知り尽くす相手であったことが確認される。

「知音」の二字は『列子』の記事には見えないが、もともと音律に精通する意味で『礼記』楽記に「不知音者、不可与言楽」（音を知らざれば、与に楽を言うべからず）とあり、『呂氏春秋』仲冬紀・長見にも、鐘の音階を正しく聴き分ける意味で、楽人師曠のことばとして「後世有知音者、将知鐘之不調也」（後世に音を知る者有らば、将に鐘の調わざるを知らんとす）と見える。ここに伯牙と鍾子期の故事が融合し、「自分の音楽をよく理解してくれる者」という意味の「知音」の用法が定着していったのであろう。その早い例が「古詩十九首」に見える。また、前掲の曹丕「与呉質書」は、この故事を引いて理解者を鍾子期になぞらえ「知音」と言った例である[61]。

・一弾再三歎、慷慨有余哀。不惜歌者苦、但傷**知音稀**

（一たび弾じて再三歎じ、慷慨して余哀有り。歌う者の苦しきを惜しまず、但だ知音の稀なるを傷む）

「古詩十九首」其五（『文選』巻二九）

・昔伯牙絶絃於鍾期、仲尼覆醢於子路。痛**知音之難遇**、

傷門人之莫逮。（昔 伯牙は絃を鍾期に絶ち、仲尼は醢を子路に覆す。知音の遇い難きを痛み、門人の逮ぶ莫きを傷めり。）

曹丕「与呉質書」（『文選』巻四二）

やや時代が下ると、音楽や故事とは切り離して「真の理解者」を表すものが、陶淵明と鮑照の詩集に見出せる。後者は鮑照の作ではなく、鮑照「月下登楼連句」に付された荀原之という人物の句である。

・量力守故轍、豈不寒与飢。**知音苟不存**、已矣何所悲

（力を量りて故轍を守れば、豈に寒と飢とあらざらんや。知音苟しくも存ぜずんば、已んぬるかな何ぞ悲しむ所ぞ）陶淵明「詠貧士詩」（『文選』巻三〇）

・嗽玉延幽性、攀桂藉**知音**（玉に嗽ぎて幽性を延き、桂を攀ぢて知音に藉る）

鮑照「月下登楼連句」（宋詩巻九）

二首とも劉宋の作であり、陶淵明の詩はちょうど謝霊運が「賞心」の語を用いた時期（四二二～四三〇ころ）に重なる[62]。

伯牙と鍾子期の故事からは、「知音」のほかに「賞音」という表現も生まれた。まず、『列子』と同じくこの故事を載せる『呂氏春秋』孝行覧・本味に「賞音」の文字が記されていたであろうことが、李善注を通して確認できる。

鍾期死而伯牙乃破琴絶絃、以為世無復**賞音者**也。（鍾期死して伯牙乃ち琴を破り絃を絶ち、以為らく世に復た音を賞する者無しと。）

劉琨「答盧諶詩幷書」李善注引『呂氏春秋』（『文選』巻二五）

李善注の引用では、鍾子期の死後、伯牙が琴を絶つ場面に、鍾子期が伯牙の演奏を理解しめでる意味で「賞音」の語が用いられている。同じ引用は、嵇康「琴賦」（『文選』巻一八）、劉琨「答盧諶詩並書」（『文選』巻二五）、司馬遷「報任少卿書」（『文選』巻四一）にも見え、文字に若干の異同があるものの「賞音」の部分は変わらない[63]。現行の『呂氏春秋』では「復賞音者」は「足復為鼓琴者」（琴を弾いて聴かせるにふさわしい者）に作るが、のちの詩文に「賞音」を「知音」と同じ意味で用いた例が散見する[64]。

・事君直道、与朋信心。雖実唱高、猶**賞爾音**。（君に事うるに直道、朋と信心あり。実に唱高しと雖も、猶お爾の音を賞す。）

潘岳「夏侯常侍誄」（『文選』巻五七）

・隠机独詠、**賞音者**誰（机に隠りて独り詠ず、音を賞

する者は誰ぞ）　孫綽「答許詢詩」七（晋詩巻一三）

・此書行、故応有**賞音者**。（此の書行われ、故に応に音を賞する者有るべし。）
　范曄「獄中与諸甥姪書以自序」（『宋書』范曄伝）

・既幸已詮述、想便宜広宣、使**賞音者**見也。（既に幸いにして已に詮述すれば、便ち宜しく広く宣べ、音を賞する者をして見しむべけんことを想う。）
　釈智林「致周顒書」（『高僧伝』巻八「義解五」）

潘岳は、夏侯湛の徳を高尚な唱（うた）に喩えて自分こそがよき理解者であるといい、孫綽は、知己である許詢と遠く離れた孤独を詠じる。范曄は自ら著した『後漢書』について、釈智林は周顒の「三宗論」について、真の理解者の出現を後世に託して「賞音者」と呼んでいる。潘岳を除く三例は、いずれも音楽と関わりのない用法であり、時代は西晋の潘岳、東晋の孫綽のあと謝霊運を挟んで、劉宋の范曄と智林がつづく[65]。

謝霊運もまた、「Ⅳ山居賦」の自注の中で「賞音」の表現を用いた。

故停筆絶簡、不復多云。冀夫**賞音**悟夫此旨也。（故に筆を停めて簡を絶ち、復た多くは云わず。冀わくは夫の賞音の夫の此の旨を悟らんことを。）

「Ⅳ山居賦」自注

これは賦の結びで、隠棲して己の道を全うした古賢の生き方について述べたあと、真理の究明を後世に託して筆を置く部分[66]に付された自注である。真の理解を後人に託す点では孫綽・范曄・釈智林の例と共通するが、その三例が「者」の字を伴って理解者を表すのに対し、謝霊運はおそらく「賞音」の二字に人の意味を含ませている。謝霊運において、「賞音」は理解者の意味で完全に熟した表現であった。

伯牙と鍾子期の故事から生まれた「知音」や「賞音」の表現は、最初は楽器や歌など音楽を正しく聴き分ける文脈で、大半はそういった理解者が得られない憂いを背景として用いられたのが、東晋から宋のころになると、音楽から切り離されて「得がたき真の理解者」を表すようになった。陶淵明をはじめとする五つもの用例が、ほぼ同じ時期に認められることは、この表現が謝霊運の時代の文学に広く根付いていたことを物語る。謝霊運は、「心」が通い合うこと、真の価値が理解されることを死の間際まで求め、互いに響き合うような交わりを理想とした。真の理解者の意味で定着していた「知音」や「賞音」が、この時代、謝霊運によって「賞心」と言い換えられたのは、詩語史における自然な展開でもあっただろう[67]。

もっとも、謝霊運の「賞心」を「知音」や「賞音」の言い換えであると考えると、「賞心」という語の構造上の問題が現れる。⑤の詩序の「良辰、美景、賞心、楽事」について、「賞心」のみ「心を賞する（者）」という動賓構造で捉えられるのかという問題である。しかし謝霊運は「G鞠歌行」でも「覧古籍、信伊人、永言知己感良辰」（古籍を覧るに、信（まこと）に伊の人あり、知己を永言し良辰に感ず）と詠い、「知己」と「良辰」とを並べていた。「賞心」が謝霊運にとって熟した表現であれば、四つの語の構造が厳密に揃わなくても問題ないのではないか。

あるいは、「賞心」を真の理解者としながら「良辰」「美景」「楽事」と同じ構造と考え、「賞する心（をもつ者）」と解することも不可能ではない。その場合、「本質を見極める心（をもつ者）」「正しい価値観（をもつ者）」といったニュアンスを帯びようか。「賞」の対象は自分の「心」に限定されず、才能や文学、音楽などと広がるため、文壇の集いに兼ね備わった要素としては、この方が適切なようにも思われる。しかしながら、⑤以外の用例を見るに、「悟（む）」きあったり「離」れたり、「忘」れるべくもない相手の存在を、人を表す文字を記さず「～する心」という言い方のみで表し得るだろうか。「賞心」が理解者の意味であるならば、すでにその意味で定着していた「知音」や「賞音」の言い換えであると考える方が、無理がないように思われる。

もう一つ、この理解を支える材料が「Ⅳ山居賦」の序に存在する。先に挙げた結びの自注に似て、この賦の真意や価値が理解されることを読者に期待する内容である。

覧者……去飾取素、儻値**其心**耳。意実言表、而書不尽。遺迹索意、託之**有賞**（覧る者……飾を去り素を取らば、儻しくは其の心に値（あ）うのみ。意は実（まこと）に言もて表わさんとするも、書は尽くさず。迹を遺（わす）れて意を索（もと）むること、之を有賞に託さん）

華美な装飾は求めず飾らない本質の部分を見てもらえれば、もしかすると「其の心」に当面できるかもしれない。言葉や文章で意を尽くすのは困難ではあるが、形に拘泥せず「意」を追求することを「有賞」に託そう、と述べる[68]。つまり謝霊運は、賦に込めた己の真意を「心」と記し、それを真に理解することを「賞」、理解できる者を「有賞」と記しているのである。

ここにも、得がたい真の理解者を「賞心」と表現した謝霊運の創意を、垣間見ることができるだろう。

七　『文選』の注

最後に、『文選』所収の作について、「賞心」の語に付された注を見ておきたい。【李】は李善注、【五】は五臣注、【鈔】は集注本に引かれている「文選鈔」である。

「①初発都」将窮山海迹、永絶**賞心**悟

【李】言今遠遊、将窮山海之迹、賞心之対於此長乖。

【五】翰曰、言我将尋山水窮尽其迹、与賞心之友長絶、不可復得相対而言。

「②晩出西射堂」含情尚労愛、如何離賞心

【李】言鳥含情尚知労愛、況乎人而離於賞心也。

【五】良曰、……如何使我離賞心之人乎。

「③遊南亭」我志誰与亮、賞心惟良知

【李】なし

【五】（向曰、亮信、良美、知友也。）

「④田南樹園激流殖援」唯開蔣生逕、永懐求羊蹤。賞心不可忘、妙善冀能同

【李】なし

【五】翰曰、賞心之楽不可忘者、則妙善之道所望同於古人。

【鈔】賞心、謂求・羊也。

「⑤擬魏太子鄴中集詩序」天下良辰美景、賞心楽事、四者難幷。

【李】なし

【五】（向曰、四者、謂上良辰等事。）

「⑥酬従弟恵連」永絶賞心望、長懐莫与同

【李】なし

【五】翰曰、言無敢望有識我心者、……

五臣注が④を「賞心の楽しみ」とする以外、①「賞心の友」、②「賞心の人」、⑥「我が心を識る者」のように人であることを強調するのに対し、李善注は①「賞心との対面から離れる」、②「賞心から離れる」というそのままの釈義となっており、「賞心」が人を指すのかどうかも、「賞」の対象が何であるかも明らかにしていない。典拠を記さないことからは、「賞心」が謝霊運による創出であることが改めて確認でき、「賞心」の意味が確定されないことからは、解釈に私的な憶測を加えない李善注の実証的な施注態度が確認できる。少なくとも、李善注が「賞心」を「自然を賞する心」と解したのでないことは明らかであろう[69]。

五臣注については、早くから誤謬の多いことが指摘されているため[70]全面依拠はできないが、李善注補足の性格をもつ「文選鈔」[71]が、④の「賞心」について、知己の隠者である羊仲・求仲を指すと解釈している点は注目に値する。

謝霊運の「賞心」が知音の意味であるという本稿の結論について、『文選』の注と齟齬を来たす部分はない。むしろ補強する記述が「鈔」に認められるのである。

おわりに ――後世への継承

本稿では、謝霊運の「賞心」が「山水をめでる心」ではなく「わが心を知る人、知音」の意味であることを論じてきた。「賞心」は、永嘉に左遷される際、都での交流の断絶を嘆く場面で用いられたのを初めとして、一貫して理解者の意味で用いられ、「賞心」と交わるようすは向き合って語らう姿に映されていた。永嘉や始寧では、「賞心」と隔たった悲しみと慕情を詠い、隠遁の思いや悟りの境地の共有者としてその存在を求めた。また楽府には、心を曝け出し響き合うような理想の交友像が「賞心」の語によって示されており、謝霊運が心の通い合いを切に求めたことは、「臨終詩」からも見て取れた。「賞」の本質は価値を認めてよろこびめでることであり、佐竹保子氏の研究によれば、二者の間に価値に見合うだけのやりとりが交わされるイメージを核とする。一字の「賞」は、永嘉以降、人間から山水に対象を拡げ、謝霊運独自の山水体験を表すことばとなった。それは、山水の中に「真」を見出して交感を果たしたり、「理」を得て悟りの境地に繋がるような体験であった。さらに、謝霊運の「賞心」は、「知音」の語の系譜に位置づけることができた。伯牙と鍾子期の故事から生まれた「知音」「賞音」の表現を追っていくと、ちょうど謝霊運の時代に、故事から独立して音楽とは関係のない文脈で「得がたき真の理解者」を表す用法が定着していた。ここから、心を重視し心の交流を求めた謝霊運が「知音」を「賞心」と言い換えた可能性が指摘でき、そこには、才能への自負が込められていることもうかがえた。以上の理解は「Ⅳ山居賦」によっても補強でき、『文選』の注とも矛盾を生じていなかった。

＊　＊　＊

しかしながら、謝霊運の「賞心」は、後世に継承される過程で、「知音」から「賞する心」「風流な心」へと意味の変容が起こったように推察される。ともすれば、そのことが謝霊運の「賞心」の解釈に分岐を生む一因になったのではないだろうか。

たとえば、月に語りかけて「賞心の者に遇ったらその者を照らせ」という次の句では、「賞心」は「月をめでる心をもつ者」と解するのが適当であろう。

儻遇賞心者、照之西園宴（儻し賞心の者に遇わば、之を西園の宴に照らせ）虞羲「詠秋月詩」（梁詩巻五）

鍾嶸『詩品』において斉の詩を評した次の文も、「賞心」を知音ととっては明らかに文意が通じない。

欣泰・子真、並希古勝文、鄙薄俗製。賞心流亮、不失雅宗。（欣泰・子真は、並びに古を希いて文に勝り、俗製を鄙しみ薄んず。賞心は流亮にして、雅宗を失わず。）　鍾嶸『詩品』巻下

「流亮」は、遠くまで澄みわたる清明さをいう[72]ことから、「文学の趣を理解する心」が冴えわたっているとい

った意味であろう。

唐詩の中には、「めでる心」を表す「賞心」が、さらに多く見出せる。

・康楽愛山水、**賞心**千載同（康楽は山水を愛す、賞心千載同じ）
　劉長卿「題蕭郎中開元寺新構幽寂亭」（『全唐詩』巻一四九）

・秋風過楚山、山静秋声晩。**賞心**無定極、仙歩亦清遠（秋風 楚山に過ぎ、山静かにして秋声晩し。賞心定め極むる無し、仙歩 亦た清遠なり）
　銭起「過桐柏山」（『全唐詩』巻二三六）

・満空乱雪花相似、何事居然無**賞心**（空に満つる乱雪花相い似たり、何事ぞ居然として賞心無からん）
　裴度「雪中訝諸公不相訪」（『全唐詩』巻三三五）

・閏余春早景沈沈、禊飲風亭恣**賞心**。（閏余 春早くして景沈沈たり、禊飲 風亭 賞心を恣にす）
　李翺「奉酬劉言史宴光風亭」[73]（『全唐詩』巻三六九）

劉長卿は、謝霊運が山水を愛したことをいって、「賞心」は千年の時が経っても変わらないという。この「賞心」は「山水をめでる心」に他ならない。銭起の例は、仙界のような山中で、その境地をめでる心「賞心」が果てしなく尽きないことを詠う。裴度は、空一面に舞う花びらのような雪を描き、「なぜ「賞心」がないのかね」と遊びに来ない諸公らに戯れ、李翺は上巳の宴で「賞心」を心ゆくまで楽しむと詠う。これらは、雪景色や宴をめでる「風流な心」といった意味合いであろう。

『文選』には、謝霊運以外にも、沈約「遊沈道士館」（『文選』巻二二）、謝朓「之宣城出新林浦向版橋」（『文選』巻二七）、江淹「雑体詩」（『文選』巻三一）に「賞心」の語が見られ、これらが最も早く謝霊運を受容した例と思われる。謝朓には「賞心」のほかにも謝霊運の「賞」の表現を大きく発展させたと思しき例が多くある。謝霊運以降唐代にかけての「賞心」および「賞」の用法を明らかにすることは、謝霊運のみならず『文選』受容の問題とも関わるだろう。今後の課題としたい。

注

[1] 佐竹保子「謝霊運「心賞」考」（『集刊東洋学』一〇五、二〇一一）では、おおむね日本では「自然の山水を賞（たのし）む心」、中国では「心を知る朋友」の方向で解釈されると述べる。このほか中国では玄学と結びつけて理解するものもあり、張兆勇『謝霊運集箋釈』（中国社会科学出版社、二〇一七）では「「賞心」應是大謝明確的心靈之約。……它應當是指順應於自然、安和於性情的玄言境界和心靈狀態」（「永初三年七月十六日之郡初発都」の項）と概括する。

[2] 小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』第二章第一節一「謝霊運」、第二章第六節一「「賞」の意味するもの」（岩波書店、一九六二）、小尾郊一『謝霊運―孤独の山水詩人』（汲古書院、一九八三）。

[3] 森野繁夫『謝康楽詩集』（上下二巻、白帝社、一九九三・一九九四）、森野繁夫「謝霊運の「賞心」について」（『謝霊運論集』白帝社、二〇〇七）。

[4] 林田慎之助「謝霊運の「賞心」について」（『六朝の文学覚書』第八章、創文社、二〇一〇）。

[5] 川合康三「〔書評〕六朝文学に関する十二章―林田慎之助『六朝の文学 覚書』」（『創文』五三五、二〇一〇・一〇）。川合氏は「謝霊運の「賞心」を「わが心に賞（かな）う人」わが「心を賞（し）る人」（二〇二頁）と捉えることで理解しやすくなる詩句は確かに増えるが、果たしてそれですべてが解決するだろうか。あるいは「知己」に類した言葉を使わずに「賞心」といったことを手がかりにして、そこからさらに深く踏み込むことはできないか。「賞心」を逆転した「心賞」の語はどうなるのだろうか」と述べる。また、大上正美氏による書評「二掘りかへし耕しなほす時―六朝文学研究の展開の契機として読む『六朝の文学 覚書』」（大上正美『六朝文学が要請する視座―曹植・陶淵明・庾信』研文出版、二〇一二）は、「賞心」を〈自分の心を識ってくれる人〉と解する場合の交友関係の具体像から、蘭亭の遊と通底する文化環境や政治的な視点を見るべきとの課題を呈示する。

[6] 「中国古典における「賞」（上）」（『新しい漢字漢文教育』四四、二〇〇七）、「中国古典における「賞」（下）」（『新しい漢字漢文教育』四五、二〇〇七）、「『世説新語』の「賞」」（『六朝学術学会報』一〇、二〇〇九）。

[7] 「李善注「事無高翫、而情之所賞、即以為美」考―謝霊運「従斤竹澗越嶺渓行」詩の「情」の解釈に関わって」（『集刊東洋学』一〇一、二〇〇九）、「謝霊運詩「心賞」考」（前掲注1）、「謝霊運「遊南亭」詩における「賞心」―「惟良知」解釈とのかかわりにおいて」（『集刊東洋学』一〇九、二〇一三）。

[8] 「贈安成」に「微言是賞、斯文以崇」、「述祖徳二首」其一に「恵物辞所賞、励志故絶人」。

[9] 「Ⅰ撰征賦」の「務役簡而農勧、毎労賞而忠甄」は東晋王朝における太平の御代をたたえて民の功労に対する褒賞を、「Ⅰ撰征賦」の「賞彌久而愈私」、「Ⅱ辞禄賦」の「荷賞延之渥恩」は謝霊運が皇帝から受けた恩賞を表す。「Ⅳ山居賦」の「研書賞理」は書物に真理を探究するよろこびを、「在茲城而諧賞」は仏道修行の安居で仏の理を得て和らぎよろこぶさまを描いたもの。

[10] 本稿では、謝霊運の詩文および制作年は、おもに顧紹柏『謝霊運集校注』（里仁書局、二〇〇四、『文選』所収の作は胡刻本『文選』を底本とする）に拠り、適宜、黄節『謝康楽詩注・鮑参軍詩注』（中華書局、二〇〇八）、森野繁夫『謝康楽詩集』（前掲注3）等を参照した。明らかに誤りと思われる字は、顧紹柏校注によって改めた箇所がある。謝霊運以外の詩文は、『文選』に収められているものは『文選』（胡刻本）

に拠り、それ以外はおもに『先秦漢魏晋南北朝詩』（逯欽立輯校、中華書局、一九八三）、『全唐詩』（中華書局点校本）に拠った。

[11]『毛詩』陳風「東門之池」に淑姫と結ばれることを願った「可与晤歌」「可与晤語」「可与晤言」のリフレインがある。そのほか阮籍「詠懐詩十七首」其十五（『文選』巻二三）の「日暮思親友、晤言用自写」、潘尼「贈陸機出為呉王朗中令」（『文選』巻二四）の「彼美陸生、可与晤言」、王羲之「蘭亭序」（『晋書』王羲之伝）の「或取諸懐抱、悟言一室之内」など、いずれも親しい交流を表す。

[12] 永嘉の作「斎中読書」に当時を振りかえって「昔余遊京華、未嘗廃丘壑」というが、これは隠棲への思いを詠ったものである。「侍泛舟讃」「三月三日侍宴西池」は、劉裕の舟遊びや宴会に侍った作であり、いずれも山水をめでる行為を綴ったものではない。孫明君「謝霊運「《擬魏太子鄴中詩八首》二題」（『文学研究』一〇五、二〇〇八）にも、永初三年（四二一）以降、謝霊運の山水描写の才能が開花したという指摘がある。

[13]『宋書』謝霊運伝に「郡有名山水、霊運素所愛好。出守既不得志、遂肆意游遨、遍歴諸県、動踰旬朔、民間聴訟、不復関懐。所至輒為詩詠、以致其意焉」。

[14]「過始寧墅」「富春渚」「七里瀬」など『文選』巻二六「行旅」に収められた一連の詩からも見て取れる。

[15] 小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』第一章第二節一「行遊と自然」（前掲注2）参照。矢淵孝良「謝霊運山水詩の背景―始寧時代の作品を中心にして」（『東方学報』五六、一九八四）にも同様の指摘がある。

[16] 始寧退居時の元嘉六年あるいは八年に繋ける説もあるが、顧紹柏校注は地理や詩に詠われた時節を詳細に考証し、これを否定する（前掲注10）。現在の永嘉へのルートからはややずれる新安に赴いた理由としては、隣県に遊んだか当時は新安を通らなければならなかった可能性を指摘する。

[17]「目睹巌子瀬、想属任公釣。誰謂古今殊、異世可同調」（「七里瀬」）、「萱蘇始無慰、寂寞終可求」（「東山望海」）。

[18]「索居易永久、離群難処心。持操豈独古、無悶徴在今」。

[19]「摘芳芳靡誒、愉楽楽不燮。佳期緬無像、騁望誰云愜」。

[20]「労愛」の語は『論語』憲問篇「愛之、能勿労乎」に拠る。

[21]『荘子』大宗師に「安排而去化、乃入於寥天一」。

[22]『中国学研究論集』一六、二〇〇六。

[23] 佐竹保子「謝霊運「遊南亭」詩における「賞心」――「惟良知」解釈とのかかわりにおいて」（前掲注7）は、李善注が「亮」字に毛萇詩伝を引いて「信」じる意に解する点に着目し、『毛詩』鄘風「柏舟」に詠われた、誰にも信じてもらえない主人公の絶望を響かせていると指摘する。そして末句の「良知」は「良友」の意味ではなく、李善注が引く『尚書』君陳篇「時惟良、顕哉」（時に惟れ良し、顕れんかな）に拠って「よく知られる」と解すべきであり、末句は「我が志（おも）い」が「賞心」によって知られる希望を詠ったものである、この「賞心」は人ではなく景（山水）である可能性が高いと論じる。本稿では、晩年、臨川左遷の無念を嘆いた句「寸心

若不亮、微命察如糸」（「初発石首城」）の「亮」字（無実の心が真に理解されることを表す）との類似性に鑑みて「亮（あき）らかにせん」と訓じた。

[24] 蘇武「詩四首」其一（『文選』巻二九）に「況我連枝樹、与子同一身」とあるように、一心同体の強い結びつきを表す。元嘉の初めにともに石門に遊んだ曇隆・法流法師を指すとする説が多い（黄節注、顧紹柏校注、森野訳注など）が、李静「謝霊運「発帰瀬三瀑布望両渓」詩における「同枝條」について」（『アジア遊学二四〇　六朝文化と日本―謝霊運という視座から』勉誠出版、二〇一九）は、人間界の知己ではなく同心の仙人を指すと論じる。

[25] 嵇康「四言詩」其三（魏詩巻三）にも「鍾期不存、我志誰賞」とあり、知音の鍾子期でなければ「我が志」を「賞」してもらえないと嘆く内容が見える。

[26]「山居賦」自注に「室、石室、在小江口南岸」とあることから始寧の作とみる説もあるが、顧紹柏校注はその記述は山の形状に合わないとして永嘉説をとっており、本稿もそれに従った。永嘉説の妥当性については、矢淵孝良氏前掲注15論考の注18や堂薗淑子「「石室」の詩をめぐって―謝霊運・鮑照山水詩の比較」（『中国文学報』七二、二〇〇六）に詳しい。また堂薗氏は、当時「石室」が洞天思想につながる神仙空間として関心を集めていたことを指摘する。

[27] 堂薗淑子氏はこの「心賞」について、対象にひきつけられる心のありようを指し、神仙を思い続ける中で形作られた心の像がずっと閉ざされていたはずの霊域の光景と交差し重なり合ったことを言うものであろうと論じる（前掲注26論考）。

[28] 佐竹保子氏は、謝霊運が、陶淵明「帰去来」（『文選』巻四五）の松を撫でていとおしむ描写（「撫孤松而盤桓」）を、アレンジして織り込んだ可能性を指摘する（前掲注1論考）。

[29]『宋書』謝霊運伝に「在郡一周、称疾去職、従弟晦・曜・弘微等並与書止之、不従」、「霊運父祖並葬始寧県、并有故宅及墅、遂移籍会稽、修営別業、傍山帯江、尽幽居之美。与隠士王弘之・孔淳之等縦放為娯、有終焉之志。毎有一詩至都邑、貴賤莫不競写、宿昔之間、士庶皆遍、遠近欽慕、名動京師」。

[30] 李善注が引く『三輔決録』に「蔣詡、字元卿、隠於杜陵。舎中三逕、惟羊仲・求仲従之遊。二仲皆挫廉逃名」。

[31]『荘子』寓言篇に、顔成子游が東郭子綦に学んで九年目に、全てを一体とみる絶妙の境地に達したことが「自吾聞子之言也……九年而大妙」と記され、郭象注に「妙、善也」とある。

[32]『周易』解卦に「天地解而雷雨作、雷雨作而百果草木皆甲坼、解之時大矣哉」。

[33] 謝霊運の「理」について、たとえば矢淵孝良氏前掲注15論考は「この現象的世界を超えて存在する「根源的」普遍的真理と解せよ」「何かしら漠然とした究極的普遍的な真理の謂である」と述べ、牧角悦子『経国と文章―漢魏六朝文学論』第十章「謝霊運詩考―刹那と伝統―」、第十一章「謝霊運詩における「理」と自然―「弁宗論」及び始寧時代の詩を中心に―」（汲古書院、二〇一八）は「自然と対峙し、自己の精神の精髄を凝らすことによって、その中から忽然と浮

かび上がる真実のことである。「理」は物の自然の中に、あるがままの山水の中に、存在しているのであるが、詩人の洗練された賞識眼（賞）を待ってはじめて認識され、定着されるのである」と論じる。

[34]「属値清明節、栄華感和韶。陵隰繁緑杞、墟囿粲紅桃。鷽鸎翟方雊、織織麦垂苗。隠軫邑里密、緬邈江海遼」。

[35]『戦国策』趙策、『史記』呉太伯世家参照。

[36]『楚辞』九歌・少司命に「与女沐兮咸池、晞女髪兮陽之阿。望美人兮未来、臨風怳兮浩歌」。謝霊運の同時期の作「登石門最高頂」や「石門新営所住四面高山迴渓石瀬脩竹茂林」にも、『楚辞』の修辞を多用して石門山の神秘性を際立たせる創意が見える。

[37] 顔延之が謝霊運に和した「和謝監霊運」（『文選』巻二六）では、謝霊運から贈られた詩（「還旧園作見顔范二中書」）のすばらしさを「芬馥歇蘭若、清越奪琳珪」と形容する。

[38] 前掲注15。

[39] 小川環樹「唐詩を中心にして」「六朝詩人の風景観」「中国の叙景詩と仏教」（『小川環樹著作集』第二・一・二巻、筑摩書房、一九九七。初出は一九七〇・一九八三・一九八八）。ほかに、福永光司「謝霊運の思想」（『東方宗教』一三・一四合併号、一九五八）、衣川賢次「謝霊運山水詩論―山水のなかの体験と詩」（『日本中国学会報』三六、一九八四）、牧角悦子氏前掲注33論考などにも詳しい。

[40] 始寧期にはほかにも「理」「道」といった語を用いて悟りに繋がる山水体験を詠じたものが散見する。「慮澹物自軽、意愜理無違。寄言摂生客、試用此道推」（「石壁精舍還湖中作」）、「感往慮有復、理来情無存」（「石門新営所住四面高山迴渓石瀬脩竹茂林」）など。

[41] この詩の制作年および作詩背景については、孫明君氏前掲注12論考に詳しい。ただし孫明君氏は、廬陵王の時代ではなく、青年時代の同族兄弟との烏衣の遊びを追憶して理想を託したものであると論じる。

[42]「何図数年之間、零落略尽、言之傷心。頃撰其遺文、都為一集。観其姓名、已為鬼録。追思昔遊、猶在心目、而此諸子、化為糞壌、可復道哉」とある。

[43]『周易』乾卦・文言伝に「同声相応、同気相求。水流湿、火就燥、雲従龍、風従虎。聖人作而万物睹。……則各従其類也」。

[44] 小尾郊一氏前掲注15論考に詳しい。

[45]「念昔渤海時、南皮戯清沚。今復河曲游、鳴葭泛蘭汜」（「阮瑀」）、「朝游登鳳閣、日暮集華沼。傾柯引弱枝、攀条摘蕙草。徙倚窮騁望、目極尽所討。西顧太行山、北眺邯鄲道」（「平原侯植」）など。孫明君氏前掲注12論考でも、⑤に山水描写が少なく質朴である点に言及し、その理由を建安文人の原作を模倣したためだと指摘する。

[46] この詩序については、後藤昭雄「平安朝における『文選』の受容―中期を中心に」（『平安朝漢文学史論考』勉誠出版、二〇一二）が詳細に論じている。

[47] 二人の関係と交流は、森野繁夫「謝霊運と謝恵連」（森野繁夫『謝霊運論集』白帝社、二〇〇七）、佐藤正光『南朝の門閥貴族と文学』第一章第四節「謝氏の消長と家風の継承（2）―謝霊運・謝恵連―」（汲古書院、一九九七）に詳しい。

[48] 古くは『礼記』楽記の音楽の作用を説いた箇所に、歓び愉しむ意味で「欣喜歓愛、楽之官也」と見え、詩文では「歓愛在枕席、宿昔同衣衾」（曹植「種葛篇」、魏詩巻六）、「遂結歓愛情、君子義是親」（嵇康「答二郭詩三首」其一、魏詩巻九）のように、男女や親友など睦まじい関係を表すのに多用される。謝霊運「還旧園作見顔范二中書」でも、親しい者との別れを「長与懽愛別、永絶平生縁」と詠う。

[49] 謝恵連「泛湖帰出楼中翫月」（『文選』巻二二）にも「悟言不知罷、従夕至清朝」とあり、謝霊運の住まいは泛湖の近くにあったことから、二人の交流を詠じたものと考えられる。

[50] 藤井守「謝霊運の楽府詩」（『日本中国学会報』二七、一九七五）、森野繁夫「謝霊運と謝恵連」（前掲注47）に詳しい。

[51]「升曰『吾聞趙殺鳴犢、仲尼臨河而反。覆巣竭淵、龍鳳逝而不至。今宦豎日乱、陷害忠良、賢人君子其去朝乎。夫徳之不建、人之無援、将性命之不免、奈何』、因相抱而泣」。

[52] 前掲注43。

[53]『周易』繫辞伝上に「子曰、君子之道、或出或処、或黙或語。二人同心、其利断金、同心之言、其臭如蘭」。

[54] 季札が初対面の子産を旧知のように感じ、絹の帯を贈ると麻の衣を献上された故事を踏まえ、それ以上の交わりを求める。『春秋左氏伝』襄公二九年に、「（季札）聘於鄭、見子産、如旧相識。与之縞帯、子産献紵衣焉」。

[55] 第1句は『論語』里仁篇「子曰、徳不孤、必有隣」、第2句は『毛詩』鄭風・蘀兮「叔兮伯兮、倡予和女」および『礼記』楽記に音楽の唱和に同質の物が反応することを説いた「正声感人、而順気応之。順気成象、而和楽興焉。倡和有応、回邪曲直、各帰其分。而万物之理、各以其類相動也」、第3句は『周易』乾卦・文言伝に君子同士の感応を喩えた箇所（前掲注43）、第4句は『尚書』大禹謨に皇帝の行いが全体に影響することをいった「恵迪吉、従逆凶、惟影響」に基づく。

[56] 前掲注43。

[57] 顧紹柏校注は「G鞠歌行」に廬陵王への哀悼を読み取り、元嘉元年（四二四）に繫ける。

[58]『韓非子』和氏篇、『荘子』馬蹄篇参照。

[59] 仏教の「怨親平等」の思想に基づく。「怨親平等」とは「敵も味方もともに平等であるという立場から、敵味方の幽魂を弔うこと。仏教は大慈悲を本とするから、我を愛する親しい者にも執着してはならず、平等にこれらを愛隣する心を持つべきことをいう」（中村元『広説仏教語大辞典』東京書籍）。ただし末二句は、顧紹柏校注が底本とする『宋書』謝霊運伝には見えず、この詩は『広弘明集』巻三〇上などに拠った。稀代麻也子「『宋書』における謝霊運「臨終詩」の解釈について」（『中国文化―研究と教育』六〇、二〇〇二）は、両者の異同を検証して、『宋書』が『広弘明集』とは逆に自己の生き方を力強く肯定する作品として示していることを論じ、褊激の表現者として謝霊運を位置づけようとした沈約の意図を読み取る。

[60]「知音」「賞音」のほか、「識音」の語が嵇康「琴賦」（『文

選』巻一八）の「乱曰……識音者希、孰能珍兮」に見える。

[61] このほか「華容溢藻幄、哀響入雲漢。知音世所希、非君誰能讃」（陸雲「為顧彦先贈婦二首」其一、『文選』巻一七）、「此曲有絃無歌、今為作歌辞、以述余懐。恨時無知音者、令造新声而播於糸竹也」（石崇「思帰引序」、『文選』巻四五）など。また、「故知音者楽而悲之、不知音者怪而偉之」（王褒「洞簫賦」、『文選』巻一七）、「有美一人、婉如清揚。知音識曲、善為楽方」（曹丕「秋胡行二首」其二、『楽府詩集』巻三六）のように、「音律を解する」意味で用いられた例もある。

[62] 陶淵明「詠貧士詩」は晩年の作（四二〇年代）とされる（龔斌校箋『陶淵明校箋』上海古籍出版社、二〇一一）。鮑照の連句は「鮑博士」と記されることから、鮑照が太学博士兼中書舎人となった劉宋・孝武帝の初め（虞炎『鮑照集』序）、四五六年ころの作と考えられる。荀原之については未詳。

[63] それぞれ「子期死、伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴、以為世無賞音」「鍾期死、而伯牙乃破琴絶絃、以為世無復賞音者也」「子期死、伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴、以為世無賞音者」。

[64] このほか、曹植「求自試表」（『文選』巻三七）に「夫臨博而企竦、聞楽而竊抃者、或有賞音而識道也」、劉琨「答盧諶詩幷書」（『文選』巻二五）に「音以賞奏、味以殊珍」など。

[65] 潘岳の誄は夏侯湛が没した二九一年ころの作、孫綽（三一四～三七一）の詩の作年は不明。范曄の書簡は四四五年に獄死する直前、釈智林の書簡は劉宋の明帝（四六五～四七二）の初めに上京したころのものである。

[66] 「蘊終古於三季、俟通明於五眼。権近慮以停筆、抑浅知而絶簡」。

[67] 謝霊運による「心」の重視は、仏教思想の側面からも捉えることができそうである。福永光司氏前掲注39論考では、謝霊運が理解した頓悟が、文字や修業によらず「自己の心に自然なるものとして具わっている清浄純粋な本性に因って、一挙に妄念を除き去り、直ちに実在そのものと一つになる」ものであり、謝霊運が「因心則霊」（「仏讃」）「因心則善」（「曇隆法師誄」）「因心自了」（同上）のように心に因ることを強調するのもそのためだと指摘する。

[68] 「山居賦」の解釈は、齋藤希史「謝霊運の山居―〈居〉の文学（二）」（『中国文学報』六一、二〇〇〇）を参照した。

[69] このほか一字の「賞」に対して、李善注は「賞廃理誰通」（C）に「而賞心若廃。茲理誰為通乎」、「情用賞為美」（D）に「言事無高翫、而情之所賞、即以為美」という釈義を施す。前者の「賞心」は知己ではなく「山水を賞する心」の意と考えられるため、①に対する李善注の「賞心」と意味を違えることになるが、これについては、問題として指摘するに留める。

[70] 早くは唐末の李匡乂『資暇録』「非五臣」や丘光庭『兼明書』、宋代の蘇東坡や洪邁の記述に見える。富永一登『文選李善注の研究』第四章第三節「李善注の実証性―五臣注との比較―」（研文出版、一九九九）に詳しい。

[71] 「文選鈔」については、富永一登『文選李善注の研究』第五章第一節「集注本所引「鈔」」（前掲注70）に詳論がある。

[72] 「流亮」は陸機「文賦」（『文選』巻一七）に「詩緣情而綺靡、賦体物而瀏亮」とある「瀏亮」と同義である。

[73] 『全唐詩』巻四六八では、劉言史「奉酬」として収めるが、佟培基編撰『全唐詩重出誤収考』（陝西人民教育出版社、一九九六）はこれを誤りとする。